

日本語接続詞の構成性／非構成性

—ソシテ・ソレデ・ダカラについて—

田村早苗

1 はじめに

日本語の接続詞¹は、指示詞や接続助詞、動詞などからなると述べられることが多い。本論文で扱う接続詞、ソシテ・ソレデ・ダカラについても同様の分析が可能である。一般的には、ソシテ・ソレデには「そう」「それ」というソ系列の指示詞、ダカラには「だ」という判定詞が含まれるとされる。また、この指示詞や判定詞が「前の文を受ける」働き（このような働きを以降では「代示」と呼ぶ）をすると述べられることもある²。

この一般的な考え方にたいして、次のような問いを立てることが可能である。この分析は「構成素分析」なのか「語源の分析」にすぎないのか。つまり、共時的システムとして見た場合に「前の文を受ける」要素（以降では「代示要素」と呼ぶ）と接続助詞から接続詞の意味機能を計算できるのか、それとも、接続詞を機能に関してひとつの単位と扱わなければならないのか、が問題になる。本論文では、前者を接続詞の「構成的な見方」、後者を「非構成的な見方」と呼ぶことにする^{3 4}。

¹ 接続表現の中で、ソシテ・ソレデ・ダカラのように主として文頭に置かれる語を「接続詞」と呼ぶ。それに対して、文を終わらせずに節と節を結びつける語を「接続助詞」と呼ぶ。

² 「前の文を受ける」という表現は益岡・田窪(1992: p. 57)による。益岡・田窪(同)では、「接続助詞に由来するもの場合は、前の文の省略形と考えられる。また、指示詞を含むものは、「そ～」の部分で前の文を受けている（代用している）と考えられる。つまり、これらの文は、前の文を省略、代用という形で含んだ複文と見ることもできる。」(同: p. 57) および「接続詞、接続詞相当句の中には（中略）前文の代用形として判定詞を残すことができるものがある。」(同: p. 58) と述べられている。

³ 文法化による接続詞の分析は、非構成的見方に基づくものといえる。(Hopper and Traugott 1993 ほか)

⁴ 先行研究では、非構成的見方、つまり、接続詞をひとつの単位として扱う態度にたつて、用法の分類や接続詞相互の使い分けの分析に重点をおいたものが多い。この立場に基づく接続詞全般に対する分類的研究は、塚原(1968)、佐治(1970)、佐久間(1991)など参照。本論文で扱うソシテ・ソレデ・ダカラについての研究は、ひけ(1985, 1986, 1987)、森田(1970)、浜田(1995)など参照。

いっぽう、構成的見方をとっている研究としては田窪(1992)が挙げられる。「節+から」の節の部分の照応形にした形が「だから」であると考えられる。「それで」のほうも、「節+ので」の照応形と考えられる」(田窪 同: p. 6)

ただし、ここで挙げたいずれの研究も、構成的／非構成的見方の一方のみが正しく、他方の見

本論文は、特にソ系列指示詞を含む接続詞に関して、接続詞に構成的なものと非構成的なものの両方が存在すると主張する。更に、接続詞に含まれる代示要素に次の(1)のような制約を想定することで、これらの接続詞の機能の広がりを記述できることを示す。

- (1) 前件と後件が異なるモーダルの意味的スコープに含まれる場合には、ソシテ・ソレデは前件と照応関係を持つことができない。

「前件」という語は、接続詞・接続助詞などの接続表現に先行する文・節を指すものとして用いる。これに対し、接続表現に後続する節を「後件」と呼ぶ。また「モーダルの意味的スコープ」という語は「統語構造から決定されるモーダル助動詞⁵のスコープ」とは別のものを指している。この「モーダルの意味的スコープ」の詳細については、3節以降で詳しく扱う。

1.1 議論の展開

次節以降の議論の流れは次のとおりである⁶。

まず、2節で接続助詞と接続詞の差異を整理して、説明すべき問題点としてまとめる。3節では、モーダル助動詞の意味的スコープに注目して、構成的な接続詞と非構成的な接続詞の両方が存在することを示す。4節では、モーダル助動詞のスコープの広狹が、前件・後件の意味的關係の解釈に与える影響を先行研究に基づいて整理する。5節ではそれまでの議論をもとにして、接続詞に含まれる代示要素の性質について(1)の一般化が成り立つことを述べたうえで、2節で挙げた問題点を解決する。最後に6節で全体のまとめを行う。

方を取りうる可能性がないと主張しているわけではない。どちらの側面に注目して分析を進めるかの違いである。

⁵ 「モーダル助動詞」という用語のさす範囲は、田窪(2001, 2004)に従い、「項として節を取り、節の主語と共起制約関係を持たない語類」(田窪 2004 : p.1)とする。具体的には、ダロウ・ヨウダ・ラシイなどが挙げられる。また、本論文ではノダロウという形も全体で一種のモーダルと見なして、3節以降の議論に用いる。

⁶ 以下の議論では、話し手の交代が起こるような対話における例、および、疑問文・命令文などを含む例は対象としない。本論文で扱う接続詞のうち、ソレデの対話における用法の分析は有賀(1993)、金(2000)が扱っている。また Matsui (2002)は、対話におけるダカラの用例も含めて、ダカラに2種の用法を認め、関連性理論に基づいて2種の用法をひとつの機能から導く分析を行っている。また、疑問文・命令文などを接続する場合も含めた用例については、浜田(1995)を参照されたい。

2 接続詞の構成的な取扱いに関する問題

構成的な見方に基づいた分析を用いれば、接続詞と接続助詞の機能を統一的に説明することができ、接続詞と接続助詞のそれぞれについて個別の語彙項目として意味・機能を記述する必要がなくなる。結果として、私たちが記憶すべき語彙一機能の対の数はかなり減ることになる。これは、習得や運用の際の負担を軽減するという面からみても、あるいは接続表現の意味・機能を記述する際のシンプルさという面からも、望ましいものと考えられる。

しかし、先行研究において構成的な見方の妥当性が具体的に検討されることは少ない。このことの原因のひとつと考えられるのは、直感的にみて対応していると考えられる接続詞と接続助詞が、細かくみてゆくとかなり異なるふるまいを示すという事実である。本節では、接続詞と接続助詞が、どのように対応し、どのような相違点を持つのかをまとめる。まず、2.1 節で機能の概要について述べ、2.2 節では特にノデとソレデに関して機能の相違をまとめる。2.3 節では前件にモーダル助動詞が現れる場合に注目し、接続詞と接続助詞の機能の違いを述べる。

なお、表記の煩雑さを避けるため、以降では接続助詞に関して次のような略記を用いる。「連用形をとるテ」は「テ」、「基本形・タ形・テイル形などをとるカラ」⁷は「カラ」、「基本形・タ形・テイル形などをとるノデ」は「ノデ」と表記する。

2.1 接続詞と接続助詞の機能の概要

本節では、各接続表現の機能にどのような対応と相違が見られるかを確かめる。先行研究における個々の分類を細かく検討することはせず、一般的な説明にならって、接続表現の機能を前件と後件で述べられることがらどうしの意味的關係によって分類する。前件と後件の間に(2)に挙げた4つの意味的關係が存在すると想定しておく。(2)をもとに、本論文で取り上げる接続表現のそれぞれについて、前件・後件がどのような意味的關係を持ちうるかの概要を表にまとめたものが(3)である。

(2) 前件と後件の意味的關係

判断関係：後件で述べられる判断をする際の根拠になったことがらが前件で述べられる

因果関係：後件の事態の成立が前件の事態の成立に依存する（前件の事態が

⁷ 接続助詞カラには、基本形・タ形・テイル形などをとるカラのほか、「連用形+テ」をとるカラ」も存在する。「テカラ」とでも呼ぶべきこのカラは、接続詞ソレカラに対応するものと考えられるが、因果関係を表す機能を持たず、3章での議論をそのまま当てはめることはできないため、本論文の対象から外すこととする。

原因・理由となって、後件の事態が成立する)

時間的前後関係：前件の事態が後件の事態よりも時間的に先行する（かつ、前件と後件の事態の間に判断関係・因果関係がない）

並列関係：前件と後件の間に特別な意味関係（時間的前後・因果関係・判断関係その他）が規定されない

(3) 各接続表現と前件・後件の意味的關係

	並列関係	時間的前後	因果関係	判断の根拠
テ	○	○	△ ⁸	×
ソシテ	○	○	△	×
ノデ	×	×	○	○ ⁹
ソレデ	○	○	○	×
カラ	×	×	○	○
ダカラ	×	×	○	○

テとソシテ、ノデとソレデ、カラとダカラがそれぞれ対応する形式と考えると、特にノデとソレデに関しては、(3)の表で網掛けを用いて示した部分において、機能に違いが見られる。接続詞が機能の上で「代示要素＋接続助詞」と同等であるとする構成的な見方をとると、このような機能の違いが生じる理由が問題になる。次節では、ノデとソレデの機能の差異について具体的にみてゆくことにしよう。

2.2 ノデとソレデの差異

本節では、ノデとソレデについて、機能の差異を確認する。議論を分かりやすくするため、テ・ソシテと適宜比較しながら観察を行うことにする。最初に接続詞を用いた例を取り上げて、ノデが表す因果関係が、事態間の依存関係についての前提

⁸ 表(3)で、テおよびソシテの因果関係が△になっているのは、テ・ソシテが因果関係を表すとされる場合には、前件および後件で述べられる事態について、ノデ・ソレデ・カラ・ダカラが因果関係を表すとされる場合と異なる制限が見られるからである。例えば、テ・ソシテが因果関係を表す場合には、前件の事態が後件の事態よりも時間的に先行していなければならないが、ノデ・ソレデ・カラ・ダカラが因果関係を表す場合にはこの制限はないなどの違いが見られる。

⁹ ノデに判断の根拠を表す用法を認めるかどうか、認めるとすればノデとカラにどのような違いがあるのか、という問題は、先行研究でもしばしば取り上げられている。(永野 1952、田窪 1987、岩崎 1995 他) 本稿では、次の例が一般的に容認可能であるという事実を根拠として、ノデに「判断関係」を表す用法を認める。

- (i) 部屋の電気が消えている {から／ので} 彼はいないのだろう。(庵ほか 2001: p. 413 (2))

知識を必要とすることについて述べる。次に接続詞を用いた例を挙げて、ソレデを用いた際には必ずしも依存関係についての前提知識を必要としないことを確かめ、ソレデが並列関係・時間的前後関係を表す例を挙げる。最後に、判断関係についての差異を確かめる。

2.2.1 接続助詞テ・ノデを用いた例

次の例文において、テを用いた(4b)は自然な文と判断されるが、(4a)は不自然な文と判断される。しかし、(5)についてはa, b のどちらも自然な文と判断される。

- (4) a. ?木村さんは病院に行ったので、デパートに行った。
b. 木村さんは病院に行って、デパートに行った。
- (5) a. 木村さんは宝くじに当たったので、新車を買った。
b. 木村さんは宝くじに当たって、新車を買った。

(4a)の不自然さは、「病院に行くことがなぜデパートに行くことに結びつくのか」について一般的知識だけを前提にした推論ができないためであろう。(4a)は「病院に行くこと」と「デパートに行くこと」を結びつける依存関係が存在することを前提としている。しかし、聞き手が知識の中にその前提と対応づけられる関係を持っていない場合、解釈の過程において前提を満たすことができず「理解できない」という感覚をもたらすものと考えられる。

一方で(5a)の場合、前件と後件の事態の依存関係は、次の「一般的な」知識と、それを前提とした推論によって裏付けられる。

- (6) a. 「新車を買う」ための必要条件は「(新車を買えるだけの) まとまったお金を持っている」ことである。
b. 「宝くじに当たる」ことは「(ある程度) まとまったお金を手に入れる」ことの十分条件である。
c. 木村さんは「宝くじに当たる」ことによって、「新車を買う」ための必要条件を満たしたことになる。

聞き手が(5a)を解釈する場合、このような前件と後件の事態の関係を、上で述べた前提として対応付けることができるため、自然な文として処理することができる。

このように、接続助詞ノデは、例えば(6)に挙げたような後件の事態と前件の事態の依存関係に関する知識を前提としている。このような依存関係を前提とする意味

的關係を、因果關係と呼んでおく。

2.2.2 接続詞ソレデ・ソシテを用いた例

次に、(4)、(5)と同じ内容の前件と後件を、接続詞ソレデ・ソシテを用いて接続した場合について見てゆこう。この場合、(4a)と比べて(7a)のほうが自然であると判断される。

- (7) a(?) 木村さんは病院に行った。それで、デパートに行った¹⁰。
b. 木村さんは病院に行った。そして、デパートに行った。
- (8) a. 木村さんは宝くじに当たった。それで、新車を買った。
b. 木村さんは宝くじに当たった。そして、新車を買った。

(7a)については、前件と後件の事態の間に因果關係が前提とされず、単純に時間的前後關係に沿って述べた例としても解釈可能である。また、(9)のように時間的前後關係が規定されず、並列關係と解釈される例もある。

- (9) 広田さんは医者だ。それで、山田さんは弁護士だ。

これらの例が容認可能であることから、ソレデとノデの間には並列關係・時間的前後關係を現しうるか否かについて差異が見られることが確かめられる。ただし、ソレデの前件と後件に関する時間的前後關係としての解釈は、實際は並列關係を表す機能から二次的に出てくるものと考えることが可能である^{11 12}。

¹⁰ 「それで」に強勢を置かないで発音した場合、あるいは「で」「そいで」などの形を用いた場合には、(7a)はより自然になる。ソレデの意味機能と強勢の關係については、浜田(1995: 3.2 節)に記述がある。

¹¹ このような二次的解釈をもたらすものとしては、Grice (1975) の maxim of manner などが考えられる。

¹² テ・ソシテの時間的前後關係を表す機能も、同様に二次的なものと考えることができる。それに対して、「連用形+テ」をとるカラ(=テカラ)については、時間的前後關係を表す機能が一次的なものだと考えられる。その理由としては、テカラの前件に状態述語を取れないこと、後件が時間的に先行し、前件が後続することを明示する言語表現を用いることができないこと、などが挙げられる。

状態述語の例

- (ii) a. * 私は今日は頭が痛んでから、胃も痛む。
b. * 彼の弟は強くてから、優しい。

時間的前後關係を明示する語の例

- (iii) * 山田さんは昨日銀行に行ってから、一昨日病院に行った。

このような二次的解釈は、前件・後件で用いられる述語のアスペクトに影響される部分が多い。同じソレデを用いて接続した例でも、前件・後件が動態述語の場合は継起的に解釈されやすく、状態述語の場合は並列的に解釈されやすくなる¹³。

ソレデだけではなく、テやソシテを用いた例についても同様に、述語のアスペクトの特徴が解釈に影響を与える。

- (7) 木村さんは病院に行った。{(?)それで／そして}、デパートに行った。(動態述語)
- (9) 広田さんは医者だ。{それで／そして}、山田さんは弁護士だ。(状態述語)
- (10) a. 木村さんは病院に行って、デパートに行った。
b. 広田さんは医者で、山田さんは弁護士だ。

ソレデの時間的前後関係を表す用法が、単純な並列関係の意味機能からもたらされる二次的なものであるという考えに従えば、ノデとソレデの意味機能の差異は、因果関係が必ず前提とされるか、必ずしも因果関係を前提とせずに、並列関係を表しうるかの違いとしてまとめられる。

2.2.3 ノデ・ソレデと判断関係

次に、判断関係を表す機能についてノデとソレデの差異が見られる例を挙げる。

- (11) a. 外を歩いている人たちがみんな傘を差しているので、雨が降っているに違いない。
b. ?外を歩いている人たちがみんな傘を差している。それで、雨が降っているに違いない。

(11a)は、前件の「外を歩いている人たちがみんな傘を差している」ということがらに基づいて推論を行い、「雨が降っているに違いない」と判断を下した、という内容を表す例として解釈可能である。これが、判断関係としての解釈である。しかし(11b)は、判断関係とは解釈できない。可能なのは「外を歩いている人たちがみんな傘を差している」という事態が原因になって「雨が降っている」という事態が結果

¹³ 「状態述語」および「動態述語」という用語は、益岡・田窪(1992)による。しかし、語の指す範囲は一部異なる。本稿で状態述語と呼んでいるものは、工藤(1992)の「アクチュアルな時間的限界がない」述語にあたる。状態動詞・形容詞・判定詞「ダ」・動詞のテイル形などがこれに含まれる。動態述語と状態述語のアスペクト的特徴の違いとそれがもたらす解釈の違いについては、工藤(1989)や田窪(1993)に述べられている。

として起こる、という因果関係としての解釈のみである。このように、ソレデはノデの持つ判断関係を表す意味機能を持たない。

2.3 前件にモーダル助動詞が含まれる場合

本節では、接続表現の前件にモーダル助動詞が含まれる場合に、構成的な見方は説明できない例がみられることについて述べる。

2.3.1 ソレデの前件に現れうる要素

まず、前件にダロウを含む場合について観察する。(12)の例が示すとおり、ノデの前件にはダロウは現れ得ないが、ソレデの前件にはダロウが現れ得る。このような場合、ソレデに含まれる代示要素のソレは、前件を単純にコピーしていると考えすることはできない。

- (12) a. *あっちにいるのは田中さんの家の犬だろうので、こっちにいるのは僕の家
のポチだ。
b. あっちにいるのは田中さんの家の犬だろう。それで、こっちにいるのは
僕の家
のポチだ。
- (13) a. ?木村さんは宝くじに当たっただろう。それで、新車を買った。
b. ?木村さんは病院に行っただろう。それで、デパートに行った。

(13a)を因果関係として解釈しようとする、と、容認度がかなり低くなる。(13b)を時間的前後関係として解釈しようとした場合にも、後件の主語が「木村さん」であると解釈した場合には、容認度が下がる。ソレデの前件にダロウが含まれる場合には、前件と後件は(12b)のような並列関係としてしか解釈できない。

2.3.2 テとソシテ：前件にモーダル助動詞を含む場合

次に、前件にモーダル助動詞のヨウダ・ラシイを含む場合に、テを用いて接続した例とソシテを用いて接続した例の間に解釈の違いが見られることを指摘する。

モーダル助動詞+テの解釈

テを用いて接続した例で、前件にヨウダ・ラシイを含む場合には、他の場合と異

なる(14)のような解釈が可能である¹⁴。

- (14) 前件にヨウダ・ラシイを含む場合には、前件が推論に基づく判断、後件がその推論の根拠として解釈される。

このような解釈の存在を指摘している先行研究を挙げる。

仁田(1995)は、テを用いた従属節（仁田はこれを「シテ節」と呼んでいる）のさまざまな意味・用法を観察し、それらが実現される条件を細かく整理している。仁田が挙げた例文の中に、テを用いた従属節内に「ラシイ」を含む次のような例がある。

- (15) 前線も通過したらしくて、風も激しかった。(仁田 1995: p.124 (11))

仁田はこの例について、従属節が《判断の理由・根拠》を表すと述べている。しかし、(15)の前件・後件は、本論文における「判断関係」（＝前件が推論の根拠、後件が推論に基づく判断と解釈される意味的關係）とは異なる意味的關係として解釈される。(15)のように「も」が含まれていると解釈が多少複雑になるので、「も」を用いていない例について見る。

- (16) 前線が通過した {らしくて／ように}、風が激しかった。

- (17) 雨が降っている {らしくて／ように}、外を歩いている人たちがみんな傘を差している。(cf. p.10, (11a))

- (18) 顧客がプログラムのバグを指摘した {らしくて／ように}、担当の山下が修正作業を行った。

(16)から(18)の例は、前件が推論に基づいて導かれたことがらを述べ、後件はその推論の根拠を述べたものとして解釈される。例えば(17)の場合、後件で述べられている「外を歩いている人たちがみんな傘を差している」という事実を根拠として、前件の「雨が降っている」ということがらを推論していると解釈される。前件にラ

¹⁴ ヨウダ・ラシイはどちらも田窪(2001)がヨウダ類として分類するモーダル助動詞である。(田窪(2001)のモーダル助動詞の分類については本論文の5節で再度取り上げる。)田窪(2001)では、ヨウダ・ラシイのほかに、ソウダもヨウダ類に入るとされている。しかし、ソウダを用いた場合には(14)のような、後件のことがらを根拠として前件のことがらを推論するという解釈はされない。これは、基本形・タ形の節をとるソウダが「伝聞」、つまり第三者からの情報を根拠とする推論を表すため、後件で述べられていることがらが話者の直接経験である場合には、後件がソウダによる推論の根拠として解釈できないからである。

シイやヨウダを含む場合には、このような解釈がかなり安定して見られる。

モーダル助動詞+ソシテの解釈

前節の(16)から(18)の例と対応する、ソシテを用いた例を次に挙げる。これらの例はいずれも容認度が低く、(16)から(18)で見られたような、後件のことがらを前件の推論の根拠とするような解釈はできない¹⁵。

(19)? 前線が通過した {らしい／ようだ}。そして、風が激しかった。

(20)? 雨が降っている {らしい／ようだ}。そして、外を歩いている人たちがみんな傘を差している。

(21)? 顧客がプログラムのバグを指摘した {らしい／ようだ}。そして、担当の山下が修正作業を行った。

ソシテを用いた例には(14)のような解釈が存在しない。つまり、テとソシテは(14)の解釈の有無という点で異なる機能を持っている。接続詞の構成的見方によるならば、このような解釈の違いが生じることは予測されない。

ソシテを用いて接続した例で、前件にラシイ・ヨウダを含む例でも、並列関係として解釈することは可能である。(19)から(21)の例はかなり不自然であるが、ラシイ・ヨウダが前件に含まれている例でも、次のような例は容認度が高くなる。

(22) 妻はテレビのワイドショーに熱中している {ようだ／らしい}。そして、その隣で娘はぬいぐるみ相手におしゃべりをしている。

この場合は、前件と後件に特に因果関係や時間的前後関係はなく、目の前の光景から得られた情報を述べていると解釈される。

2.4 ダカラについて

ダカラとルカラについては機能に大きな違いが見られない。このことを実際の例で確認する。ダカラを用いた(23)とルカラを用いた(24)のどちらも、同じ意味的關係を持った前件・後件を接続することができる¹⁶。

¹⁵ 前件と後件が「因果関係」を持つという解釈は不可能ではないが、その場合も後件にノダが付いていないと、あまり自然な例にはならないようである。

¹⁶ (23c)、(24c)は後件が命令（依頼）文の例である。本論文の議論の範囲には入っていないが、参考例としてあげておく。

- (23) a. 山田さんは自転車で転んだ。だから、足を捻挫したんだ。
 b. 外を歩いている人たちが、みんな傘を差している。だから、雨が降っているに違いない。
 c. 僕は7時には家に帰るつもりだ。だから、6時半までに戻ってきてくれ。
- (24) a. 山田さんは自転車で転んだから、足を捻挫したんだ。
 b. 外を歩いている人たちが、みんな傘を差しているから、雨が降っているに違いない。
 c. 僕は7時には家に帰るつもりだから、6時半までに戻ってきてくれ。

また、ルカラとダカラの間にノデとソレデの場合のような容認度の差が生じることもない。

- (25) a. ?木村さんは病院に行ったので、デパートに行った。
 b.(?)木村さんは病院に行った。それで、デパートに行った。
- (26) a. ?木村さんは病院に行ったから、デパートに行った。
 b. ?木村さんは病院に行った。だから、デパートに行った。

2.5 2節のまとめ：問題の所在

2節では、接続詞と接続助詞の機能の差異、前件にモーダル助動詞を含む場合の違いについて述べた。特にソシテ・ソレデに関して、接続詞と接続助詞の間に本節で述べたような振る舞いの違いが存在することは、ソシテ・ソレデの全てを構成的見方によって扱うのが困難であることを意味している。接続詞と接続助詞の対応と相違に関する問題点をまとめると、次のようになる。

- (27) a. ソレデは並列関係を表す機能を持つが、ノデは持たない点。
 b. ノデは判断関係を表す機能を持つが、ソレデは持たない点。
 c. ソレデとノデについて、前件に現れ得る要素が異なる点。
 d. ソシテとテについて、前件にラシイ・ヨウダが含まれる場合の解釈の違い。
- (28) ソシテ・ソレデが(27)のような差異を示す一方で、ルカラとダカラの間に差異が見られない点。

(27), (28) の問題点については、5節で再び取り上げる。次節では、接続詞に構成

的なものと非構成的なもの、両方が存在することについて議論する。

3 接続詞の構成性／非構成性

本節では、ソシテ・ソレデおよびダカラについて、前件・後件の述べる事態にモーダル助動詞がどのように作用するかを観察することで、接続詞に構成的なものと非構成的なもの、両方が存在することを示す。

議論を進めるにあたって、用語をいくつか定義しておく。本節の議論の鍵となるのは、モーダル助動詞の「意味的スコープ」という語である。これは、c-command 関係などによって構造的に定義される「統語的スコープ」とは独立した概念として扱う。「モーダル助動詞の焦点」という語は「(モーダル助動詞が表す) 推論によって得られた新情報」という意味で用いる。また、「モーダル助動詞の意味的スコープ」という語は、「言語表現の中で、モーダル助動詞の焦点が置かれている部分」を指すものとする。

3.1 接続詞の構成性

本節では、ソシテ・ソレデ・ダカラが構成的な接続詞と考えられる場合があることを、モーダル助動詞の解釈との関係に注目して示す。

3.1.1 「文」を越える意味的スコープ

接続詞で連接された2文からなる例に関しては、次の(29)のような現象が見られる¹⁷。

- (29) 接続詞によって連接された2文のうち、後件にモーダル助動詞がついている場合、前件と後件全体が、モーダル助動詞の意味的スコープに含まれる場合がある。

(29)を確かめるために、モーダル助動詞の焦点となる情報に関する次のような制限を利用する。

¹⁷ 浜田(1995: pp.458-459, 注2)において、本節で扱うものと似た例の存在が指摘されている。

(iv) 田中さんは博士号を取った。そして、来年、本を出すそうだ／ようだ／らしい。(浜田 1995: p.459 (i))

- (30) モーダル助動詞の焦点が話し手自身の属性・内的状態や過去の直接体験に置かれた場合、その文は不自然になる¹⁸。

話し手の直接経験や内的状態などは、通常推論によらずに手に入れられる情報である。そのような情報を推論の結果得られた情報として扱うことは、特別な文脈が与えられなければ（例えば自分の経験について記憶がない場合などでなければ）自然ではない。このことを示すのが次の(31)である。

- (31) a. ?私は賞味期限切れのケーキを食べたのだろう。
 b. ?私はお腹が痛くなったのだろう。
 (32) a. 彼は賞味期限切れのケーキを食べたのだろう。
 b. 彼はお腹が痛くなったのだろう。

(31) と(32) を比べると、「私」と「彼」の違いのみによって容認度の差が生じているのが分かる¹⁹。それでは、(30)の制限に注意しながら以下の例をみてみよう。まず、ソレデ・ダカラを含む例、次にソシテを用いた例を取り上げる。

ソレデ・ダカラを含む例

ソレデ・ダカラをとまなう2文の場合、前件・後件に話し手の直接経験が含まれていても、2文全体は自然な例となる。

- (33) 私は賞味期限切れのケーキを食べた。{それで／だから} お腹が痛くなったのだろう。

(30)で述べたように、モーダル助動詞の焦点が話し手の内的状態や過去の直接経験におかれることは自然でない。(33)の例は後件で話し手の内的状態について述べており、(30)の制限に違反しているように見える。しかし、(33)は自然な例であり、容

¹⁸ 話し手に関することがらを述べた文であっても、未来に関する場合は容認度は下がらない。これは、未来に関することがらがまだ事実として確定していないものであるため、話し手自身の行動などに関しても、推論によって導かれることが不自然でないためであろう。容認度が下がらないばあいは、モーダル助動詞のスコープに関するテストとして用いることができないため、本論文では未来の事態に関して述べた例は扱わない。

¹⁹ ただし(31a)には、容認度が下がらない、自然な解釈が存在する。それは、「賞味期限切れ」という情報を焦点とする場合である。この場合、「話し手は（ケーキを食べた時点で）ケーキの賞味期限が切れていたかどうかを確認しておらず、間接的な証拠（たとえば、お腹が痛くなったという結果など）によって、賞味期限が切れていただろうという推測をおこなっている」という解釈になる。この解釈は本論文の意図するものではない。

認度が下がることはない。つまり、モーダル助動詞の焦点は、後件の「(私は) お腹が痛くなった」という事態の存在そのものにおかれているのではない。また、前件も話し手の直接体験について述べているため、前件で述べられている事態にも焦点はおかれていないことになる。

(33)の可能な解釈は、「賞味期限切れのケーキを食べること」と「お腹が痛くなること」の間に因果関係が存在することを推論しているというものである。この解釈は、ノデ・カラを用いた(34)の場合と同様である ([]は、このようなモーダル助動詞のスコープを示している)。

(34) [私は賞味期限切れのケーキを食べた {ので／から}、お腹が痛くなった] のだろう。

(33) (および(34)) において、何が推論によって得られた新しい情報（焦点）で、何が推論によらずに得られた情報であるかを整理すると、(35)のようにまとめられる。

- (35) a. 前件の事態の成立（「私が賞味期限切れのケーキを食べた」こと）
 →推論によって得られた情報でない（話し手の直接経験でも可）
 b. 後件の事態の成立（「私がお腹が痛くなった」こと）
 →推論によって得られた情報でない（話し手の直接経験でも可）
 c. 前件と後件の事態の因果関係（「賞味期限切れのケーキを食べることと、
 お腹が痛くなることの間に原因—結果の関係がある」こと）
 →推論によって得られた新しい情報である

2.2 節で述べたように、因果関係は「前件と後件の事態の間に依存関係が存在する」という前提を必要とする。ただし、依存関係の有無は「前件の事態」と「後件の事態」が決定されなければ判断できない。つまり因果関係は、前件の事態（原因）と後件の事態（結果）の間に成り立つ二項関係といえる。このように考えると、因果関係をモーダル助動詞の焦点にとる場合、モーダル助動詞の意味的スコープには、前件と後件の両方が含まれていることになる。

ソシテを含む例

次に、ソシテを含む例をみてゆく。ソシテに関しては、ソレデ・ダカラの場合とは一部異なるふるまいを示す。(36) の例を、前件と後件が因果関係（あるいは時間関係）を持つと想定しながら読むと、ソレデ・ダカラを用いた場合とは異なり、不自然になる。

(36) ? 私は賞味期限切れのケーキを食べた。そして、お腹が痛くなったのだろう。

(33) 私は賞味期限切れのケーキを食べた。{それで/だから} お腹が痛くなったのだろう。

(36) では、後件が話し手の内的状態について述べているため、単純に後件にモーダル助動詞の焦点がおかれていることで容認度が下がっているように見えるかもしれない。しかし、これは正しくない。(37a) は、前件の事態のみが話し手の過去の直接経験であるが、不自然な例である²⁰。

(37) a ? 私がプログラムのバグを指摘した。そして、担当の山下が修正作業を行ったのだろう。

b. 顧客がプログラムのバグを指摘した。そして、担当の山下が修正作業を行ったのだろう。

前件が話し手の行動であるか、話し手以外の行動であるかによって、(37a,b)のように容認度が異なることから、(37a)の不自然さをもたらしているのも(30)の制限と考えられる。つまり、ソシテを用いた例では、前件・後件の事態両方がモーダル助動詞の焦点となっている。ソレデ・ダカラのときと同じように、推論によって得られた新たな情報と、推論によって得られたのでない情報という観点で整理すると、(38)のようにまとめられる²¹。

²⁰ (37a)の2文の後にさらに文が続き、ソダロウの表す推論の根拠となる事実を述べていると解釈される場合には、(37a)の容認度は上がる。(次の例は白井聡子氏(個人談話)による)

(v) 私がプログラムのバグを指摘した。そして、担当の山下が修正作業を行ったのだろう。今は、プログラムは正常に動いている。

²¹ (35)と完全に対応する形で整理するならば、前件・後件の事態間の因果関係が焦点となっているかどうかについても考える必要がある。しかし、ソシテを用いた場合に、前件・後件の事態間の因果関係が焦点となっているかどうかは、それほど明らかではない。ただ、脚注8で述べたように、ソシテの因果関係を表わすとされる用法については、ソレデ・ダカラと異なり、前件と後件の事態の時間的關係に、「前件＝時間的に先行・後件＝時間的に後続」という制限が存在する。このことを根拠として、ソシテの因果関係を表わす機能は、時間的前後関係を表わす機能から、implicature として二次的にもたらされるものとも考えることも可能である(さらには、時間的前後関係自体も、並列関係を表わす機能から implicate されたものとみなしうる。2.2 節の議論を参照。) その場合、二次的に得られる因果関係という情報については、焦点がおかれていないと結論できるかもしれない。しかし、テ以外の時間的前後関係を表わす表現をみた場合に、すべてが因果関係という implicature を持つわけではないことなど、問題も多い。時間的前後関係と因果関係の関

- (38) a. 前件の事態の成立（「私／顧客 がプログラムのバグを指摘したこと」）
 →推論によって得られた新しい情報（焦点）である
 b. 後件の事態の成立（「担当の山下が修正作業を行った」こと）
 →推論によって得られた新しい情報（焦点）である

このように前件の事態の成立そのものも焦点となっているため、前件で話し手の直接経験が述べられているか否かが、(37a,b)のような容認度の差として現れるものと考えられる。

前件・後件の事態の成立それぞれを焦点とする（ソシテ）か、前件・後件の事態間の因果関係を焦点とする（ソレデ・ダカラ）かという違いはあるが²²、ソシテを用いた場合もソレデ・ダカラを用いた場合と同様に、前件・後件ともにモーダル助動詞の意味的スコープに含まれると考えなければ、前件の述べる内容によって容認度が増えることは説明できない。

3.1.2 照応による意味的スコープの拡張

前節では、ソシテ・ソレデ・ダカラで接続される2つの文があり、後件にモーダル助動詞が含まれるとき、前件と後件の両方が後件のモーダル助動詞の意味的スコープ内に入っていると考えられる場合があることを示した。しかし、接続詞の前件と後件はそれぞれ独立した文であるので、意味的スコープが統語構造におけるc-統御(c-command) 関係など（＝統語的スコープ）によって決定されるという一般的な考え方に従うと、前件はそのままでは後件のモーダル助動詞の意味的スコープに入りえない。前件がモーダル助動詞の意味的スコープに入りうるという事実を説明するには、スコープを広げるための何らかの操作を仮定する必要がある。

本節では、接続詞の構成的見方をとることによって、統語構造によって意味的スコープが決定されるという一般的な見方を保ったままで、文を超えて広がる意味的スコープを説明できることを示す。一方で、接続詞を構成的なものとなさない立場をとった場合に考えうる、意味的スコープを広げるいくつかの仮説を挙げ、それらの仮説に対する反証を行う。

構成的な見方に基づく説明

係についての詳しい考察は、今後の課題としたい。

²² ソレデ・ダカラとソシテが、焦点に関して異なる性質を持つ理由は、ノデ・カラを用いた従属節とテを用いた従属節の統語的な違いによると考えられる。これらの従属節が具体的にどのような統語構造をもつかについての議論は、本論文では扱うことができない。

上述のとおり、接続詞で接続された前件と後件は、構造の上から見ればそれぞれ独立した文である。そのため前件がモーダル助動詞の意味的スコープに入るには、何らかの操作が必要である。

ここで、接続詞に含まれる指示詞・判定詞などの代示要素に注目する。これらの代示要素自身は後件となる文の一部であるため、後件のモーダル助動詞が代示要素を含む従属節を統語的スコープに含んでいる場合には、代示要素自身も後件のモーダル助動詞の統語的スコープ内に入ることが可能である。ここで、接続詞の構成的見方に従うならば、接続詞に含まれる代示要素は節の代用形ということになる。モーダル助動詞のスコープ内にあつて節を代用する代示要素が、前件（に含まれる節）と照応関係を持つならば、前件は後件のモーダル助動詞の意味的スコープに入ることができると考えられる。

(33), (37a)の例について、照応関係を同一指標と矢印によって示すと(33'), (37a)のようになる²³。モーダル助動詞の統語的スコープは[]で表す。

(33') 私は賞味期限切れのケーキを食べた_i。[{それで_i / だから_i }、お腹が

 痛くなった] のだろう。

(37a) ? 私がプログラムのバグを指摘した_i。[そして_i、担当の山下が修正作業

 を行った] のだろう。

(33')では、前件がモーダル助動詞の意味的スコープに入ることによって、ソレデ・ダカラが表わす因果関係を焦点とすることが可能になり、前件・後件が話し手の直接経験であっても、全体として容認可能となる。一方、ソシテを含む(37a)では、前件が意味的スコープに入ることによって、後件だけでなく、前件の事態の成立如何もモーダル助動詞の焦点となり、結果、前件で話し手の直接経験について述べている(37a)は、不自然な例となる。

このように接続詞が前件と照応する場合の LF を一般的に表すと、次のようになる。

²³ 本論文は、現代日本語において接続詞が形態的に代示要素と接続助詞の2つに分けられるという主張をするものではない。実際、ソシテが形態的に分けられるか否かという問いの答えは明らかではない。しかし、少なくとも機能の点から見た場合、「前件と照応する」機能と「従属節を形成する」機能の2つを接続詞が持っていると考えられる。

(39) $S1_i, [(anaphor_i + conj) S2] \text{ Modal.}$



その他の仮説

構成的見方と代示要素による照応という説をとらない場合、前件がモーダル助動詞のスコープに含まれる現象に対する仮説としては、次のようなものが考えられる。

- (40) a. (接続詞なしでも) モーダル助動詞のスコープは自由に他の文に広げることができる。
- b. 後件のモーダル助動詞を前件にコピーすることが出来る。
- c. 前件に音形をもたないモーダル助動詞が含まれている。

以下、いずれの仮説も正しい予測を行わないことを示してゆく。(40a)の仮説に従った場合、次の例で前件を後件のモーダル助動詞のスコープに含むことが可能になるはずである。

- (41) ? 私は賞味期限切れのケーキを食べた。お腹が痛くなったのだろう。
- (42) 私がプログラムのバグを指摘した。担当の山下が修正作業を行ったのだろう。
- (43) $[S1. S2] \text{ Modal.}$

(41), (42)には接続詞が含まれていないため、前件と後件がどのような意味的關係として解釈されるかは明らかでない。しかし、(33), (37a)のように前件で述べられていることがらが容認度に影響することはなく、モーダル助動詞の付いている後件だけをみて、それが話し手に関することがらであるか否かで容認度が決定される。よって、(40a)の仮説は正しくないと考えられる。

また、(40b, c)の仮説に従ってできる LF は、いずれも(44) のようになる。

(44) $[S1] \text{ Modal. conj } [S2] \text{ Modal.}$

しかし(44)の LF では、ソシテを用いた場合に前件・後件の事態それぞれがモーダル助動詞の焦点になることは説明できても、ソレデ・ダカラを用いた場合に、前件と後件の事態間の因果関係だけがモーダル助動詞の焦点になることは説明できない。このことは、(33)と異なり、(45)が不自然な例となることでも明らかである。

- (45) ? 私は賞味期限切れのケーキを食べたの**だろう**。{それで／だから}、お腹が痛くなったの**だろう**。

(45)では、前件に含まれるモーダル助動詞が話し手の過去の直接経験を焦点にしているため、不自然になると考えられる。このように、ソレデを用いた例の容認度に関して間違った予測をするため、(40b, c)の仮説はいずれも一般的な説明として妥当でない。

3.2 接続詞の非構成性

ここまで、ソシテ・ソレデ・ダカラで接続された文の後件にモーダル助動詞が付いている例について、前件の事態が意味的に後件のモーダル助動詞のスコープに入っていると考えられる場合があることについて述べた。ただし、ソシテ・ソレデ・ダカラで接続されるすべての文について、このような現象が必ず起こるわけではない。本節では、並列関係として解釈されるソシテ・ソレデが非構成的であることを示す。

まず、ソシテを用いた例を挙げる。次の(46)では、前件が話し手の内的状態・属性や過去の直接経験を述べており、ソシテで接続された後件にはノダロウというモーダル助動詞が付いている。(46)で後件のモーダル助動詞が、前件にも焦点を置いているのならば、(36)と同様に容認度は下がるはずである。

- (36) ? 私は賞味期限切れのケーキを食べた。そして、お腹が痛くなったの**だろう**。
- (46) a. 私は猫好きだ。そして、彼は犬好きなん**だろう**。
b. 私はモンブランを食べた。そして、弟はチーズケーキを食べたの**だろう**。

しかし、(46)は自然な文として容認される。つまり、前件は後件のモーダル助動詞の意味的スコープ内にないということになる。

次に、ソレデの例を見る。次の(47)の後件において、話し手は自分自身の「弁護士である」という属性について述べている。

(33) 私は賞味期限切れのケーキを食べた。それで、お腹が痛くなったの
う。

(47) a. 広田さんは医者だ。それで、あの山田さんという人は弁護士なの
だろう。
b. ? 広田さんは医者だ。それで、私は弁護士なのだろう。

(47a, b)が(33)と同じように解釈されるのであれば、後件のモーダル助動詞の焦点は前件と後件の事態そのものではなく、前件と後件の事態間の因果関係に対しておかれることになる。しかし、(47a, b)ではそもそも前件の事態と後件の事態の間に一般的な知識で補えるような依存関係を見出すのが難しく、因果関係として理解しようとする和不自然な文に感じられるため、通常の文脈では並列関係として解釈するのが自然である。しかし、前件と後件が並列関係にあると解釈しても、(47b)の不自然さは解消されない。この解釈の場合、話し手自身の属性について述べている後件がモーダル助動詞の焦点となるためと考えられる。(46), (47)のような例は、後件だけがモーダル助動詞の意味的スコープ内に含まれることを示している。

前節で「代示要素が前件と照応関係を持つことによって、前件がモーダル助動詞の意味的スコープに入る」と仮定した。これに従えば、並列関係を表すソシテ・ソレデを用いた際に、モーダル助動詞の意味的スコープ内に後件だけが入っているということは、代示要素が前件と照応関係にないということの意味する。この状態を次のように図示しておく。

(46a') {私は猫好きだ}。[そして、彼は犬好きな] んだろう。

┌-----x-----┐
└-----↑-----┘

(47) ? {広田さんは医者だ}。[それで、私は弁護士な] のだろう。

┌-----x-----┐
└-----↑-----┘

(46a')や(47)のように代示要素が前件と照応関係にない場合には、前件をモーダル助動詞の意味的スコープ内に入れることができないので、後件だけが意味的スコープに入ることになる。

前件に意味的スコープが及ばないもうひとつの理由として、並列関係を表す従属節はそもそも後件のモーダル助動詞の統語的スコープに含まれない位置にある、と仮定することも可能である。この仮定に従った場合、接続詞が前件と照応関係にあっても、前件に意味的スコープは及ばないことになるからである。

(48) S1_i. (anaphor_i + conj) [S2] Modal.

┌-----↑-----┘

しかし、この仮定をおいたとしても、並列的な機能を持つ場合も含めた、すべてのソシテ・ソレデが構成的であると考えすることはできない。本論文では、構成的な接続詞は機能的に「代示要素＋接続助詞」と等価であるとみなしている。この前提の下では、ソシテ・ソレデが常に構成的であるならば、ソシテとテ、ソレデとノデの間に機能の差異は存在し得ないことになる。しかし実際には、ノデを用いた例で、従属節がモーダル助動詞の統語的スコープに入らないときには、前件と後件は判断関係と解釈され、並列関係とは解釈されない。また、ソシテとテの間にも一部機能の違いが見られる(2.2, 2.3 節)。

このようなモーダル助動詞の統語的スコープの広狭と接続表現の機能に関しては、次の4節で詳しく取り上げる。

3.3 3 節のまとめ

3 節ではまず、接続詞が2つの文を接続する場合に、前件が「意味的に」後件のモーダル助動詞のスコープ内に入っているかのように解釈される場合があることを指摘した。そして、文としては後件から独立している前件が、後件のモーダル助動詞の意味的スコープに入るのは、接続詞に含まれる代示要素と前件が照応関係にあるためだという仮説を示した。さらに3.2 節では、前件と後件が並列関係として解釈される場合には、接続詞は非構成的であることを示した。

4 モーダル助動詞のスコープと前件・後件の意味的關係

3 節において、接続詞に構成的なものと非構成的なもの、2つのタイプがあることを示した。これら2タイプの接続詞は、モーダル助動詞のスコープの広狭によって、どのような機能を持った接続詞が現れるかが決定される場合がある。具体的には、次の(49)が成り立つ。

- (49) 後件に「スコープの広いモーダル助動詞」が含まれない場合、前件と後件は
- | | |
|---|---------------------|
| { | ソシテ・ソレデを用いた場合には並列関係 |
| { | ダカラを用いた場合には判断関係 |
- として理解される。

本節の議論は次のように進められる。まず4.1 節では、田窪(1987, 1992, 2001)の研究に基づいて、モーダル助動詞を「スコープが広い」と「スコープが狭い」も

のとに分ける。4.2 節では、後件のモーダル助動詞の「スコープが狭い」場合について、接続詞の前件・後件がどのような意味的關係として解釈されるかをまとめ、提示要素がソ系列指示詞である場合と判定詞ダである場合で可能な解釈が異なることを指摘する。

4.1 2種のモーダル助動詞とノダ

田窪(1987, 1992)は、日本語の理由を表す節について、焦点との関係に注目して次のように指摘している。即ち、ノダを伴う(50a)、(51a)では焦点は理由の部分 (= 前件) にあり、因果関係を表す用法となる。一方で、ノダを伴わないときには焦点は後件の動詞にあるため、前件の情報を提示し、それから帰結できる後件を新規に提示する文になる。つまり、推論の根拠となる情報を提示する用法 (= 本論文で「判断関係」と呼ぶ用法) となる。この用法を持たないソレデを用いた場合には、文法性が下がる。

- (50) a. [彼が行ったから、彼女も行った]のでしょう。(田窪 1987: p.43, (35))
 b. 彼が行ったから[彼女も行った]でしょう。(田窪 1987: p.43, (33))
 (51) a. 田中はアメリカに 10 年も住んでいたんだ。{それで、だから} 英語ができるんだよ。(田窪 1992: p.1104 (14))
 b. 田中はアメリカに 10 年も住んでいたんだ。{だから、*それで} 英語ができるよ。(田窪 1992: p.1104 (14))

また田窪(2001)では、推論の根拠を述べる理由節を用いることが可能かどうかなど、いくつかの基準を用いて、モーダル助動詞をダロウ類 (= だろう、かもしれない、はずだ²⁴) とヨウダ類 (= ようだ、らしい、そうだ) の 2 種に分けている²⁵。

この 2 種のモーダル助動詞と、カラ節・ノデ節との相関について見てみよう。ダロウ類はそのままでは(52a)のような推論の根拠を述べるカラ節・ノデ節しかとらないが、ヨウダ類を用いた場合は、カラ節・ノデ節は後件の事態が起こった原因を述べるものと理解される。つまり、ダロウがノダを伴う場合のように、理由節に焦点

²⁴ このうちハズダについては以下では扱わない。ダロウ・カモシレナイとは異なり、ハズダは前に節+ノダを取れないためである。ハズダのこのような性質については別に検討が必要であるが、本論文では問題にしない。

²⁵ 田窪(2001, 2004)では、ダロウ類は「現実の可視的状況とは別の状況である非可視的状況、未来の状況、仮想的な状況に対する言明であり、現実の状況や、仮に受け入れた状況から推論などで投射された状況を述べる文につく」(田窪 2004 : p.11)、ヨウダ類は「現実の状況に対する言明であり、現実の状況を生じさせた原因を述べる文につく」(同 : p.11) と特徴付けられている。

がある解釈になる。このような焦点の位置が各助動詞の統語的スコープを反映していると考えるならば、ダロウ類・ノ+ダロウ類・ヨウダ類の統語的スコープ ([]で示す) は次のようになる²⁶。

- (52) a. 田中はアメリカに10年も住んでいた {から／ので}、[英語ができる] {だろう／かもしれない}。
 b. [田中はアメリカに10年も住んでいた {から／ので}、英語ができる] {のだろう／のかもしれない} ²⁷。
 c. [田中はアメリカに10年も住んでいた {から／ので}、英語ができる] {ようだ／そうだ／らしい}。

ダロウ類のようにカラ節・ノデ節を統語的スコープに含まないモーダル助動詞を「スコープの狭いモーダル助動詞」、ヨウダ類・ノダ・ノ+ダロウ類のようにカラ節・ノデ節を統語的スコープに含むものを「スコープの広いモーダル助動詞」と呼ぶことにする。

4.2 モーダル助動詞のスコープと前件・後件の意味的關係

前節に挙げた田窪(2001)に従えば、後件に「スコープの広いモーダル助動詞」が含まれないときには、ソレデで前件と後件を接続すると、容認度の低い例ができることになる。しかし、これは前件が「推論の根拠となる情報を提示する」用法(= 本論文が「判断用法」とするもの)を問題にした場合である。後件にスコープの広いモーダル助動詞が含まれていなくても、「並列関係」として理解されるときには容認可能になる。

- (53) 広田さんは医者だ。それで、山田さんは(きっと)弁護士だろう。

これはソレデだけに限った性質ではない。ソシテを用いて接続した2つの文につ

²⁶ ノダロウは「の(だ)」+「だろう」と分析できるが、本論文では便宜上ノダロウ全体をひとつのモーダル助動詞のように扱って議論を行う。

²⁷ ノ+ダロウ類の場合、後件のみがスコープの内側にある解釈も可能である。つまり、(52a)にはスコープの広さに応じて2つの解釈が存在する。(田窪 1992 参照)

- (vi) 田中はアメリカに10年も住んでいたから、[英語ができる] {のだろう／のかもしれない}。

いても、後件のモーダルがスコープの広いモーダル助動詞を含んでいないと、「並列関係」として理解される。

(54) 広田さんは医者だ。そして、山田さんは（きっと）弁護士だろう。

(55) 先週の日曜日は、私と兄が風呂掃除をした。そして、母に散々小言を言われた弟は、たぶん自分の部屋を片付けただろう。

これらの例において、ダロウ類のモーダル助動詞のスコープには接続詞を除く後件だけが含まれる。例として、(53)についてモーダル助動詞のスコープを示すと、次のようになる。

(53') 広田さんは医者だ。それで、[山田さんは（きっと）弁護士] だろう。

同じように後件だけがモーダルスコープに含まれる場合でも、ダカラを用いて接続すると、田窪(1992)が述べるとおり判断関係として理解されることになる。(56) 言えば、後件の「弁護士だろう」という判断は、前件の「広田さんは医者だ」という判断を根拠にしていなければならない。

(56) 広田さんは医者だ。だから、[あの山田さんという人は（きっと）弁護士] だろう。

このように、後件にスコープの広いモーダルが含まれない場合には、(49)の一般化が成り立つことが確認できる。

4.3 4 節のまとめ

本節では、モーダル助動詞に「スコープが広い」と「スコープが狭い」ものの2種類があることを、先行研究に基づいてまとめた。その上で、後件にスコープの広いモーダル助動詞が含まれない場合の前件・後件の意味的關係について、(49)のように一般化できることを確かめた。

5 代示要素の照応可能性と接続詞の機能

本節では、ここまでの議論に基づいて、接続詞の前件との照応可能性に関して(1)のような制約が存在することを主張する。

- (1) 前件と後件が異なるモーダルの意味的スコープに含まれる場合には、ソシテ・ソレデは前件と照応関係を持つことができない。

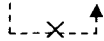
また、ダカラに関してはこのような制約が存在しないことも示す。5.1 節では、前節までの議論を整理して、(1)の制約を提案する。次に 5.2 節において、(1)を仮定することで 2 節で述べた接続詞と接続助詞の振る舞いの違いを説明できることを示す。

5.1 照応可能性に関する制約

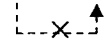
ソシテ・ソレデを含む例の場合

(1) の制約に関して議論する前に、ここで 3 節、4 節の議論を振り返っておく。3 節の議論によって、ソシテ・ソレデに構成的なものと非構成的なものという 2 つのタイプが存在し、前件と後件で述べられることがらが単純な並列関係として解釈される場合のソシテ・ソレデは非構成的であり、前件と照応関係を持たないということを示した。また 4 節では、後件に含まれるモーダル助動詞がテ節・ノデ節をスコープに含まない (= 「スコープが狭い」) ものであるとき、ソシテ・ソレデの前件・後件は並列関係と解釈されると述べた。これらの議論の結果をそれぞれ一般化した図式で表すと、次のようになる²⁸。

(57) S1. [(anaphor + conj) S2] Modal.

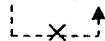


(58) S1. (anaphor + conj) [S2] Modal.



(57)と(58)の図式の共通点は、このままでは分かりにくい。ここでさらに「意味表示のレベルではすべての命題についてモーダルが決定される。ほかのモーダルの意味的スコープに入っていない命題は、意味表示のレベルで、「断定」のモーダルをもつものとして処理される」と仮定すると、非構成的な接続詞が現れる場合の特徴をより一般的にまとめることができる。(57)、(58)のそれぞれについて、すべての命題について意味的にモーダルが決定された状態を、次に示す。

(57) [S1.] [(anaphor + conj) S2] Modal.



²⁸ 前件と照応関係を持たない非構成的なソシテ・ソレデを、便宜上 (anaphor + conj) と表記する。

(58') [S1.] (anaphor + conj) [S2] Modal.



この図式に従うと、接続詞の照応可能性は(1)のように一般化できる。

ダカラを含む例の場合

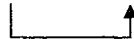
ダカラを含む例に関しては、(1)のような制約は存在しない。

ダカラによって接続される場合は、後件のモーダル助動詞のスコープが狭い場合に、前件と後件が判断関係として解釈される。これは、カラを用いた場合と同じ意味的關係である。

- (52') a. 田中はアメリカに 10 年も住んでいたから、[英語ができる] {だろう／かもしれない}。
 b. 田中はアメリカに 10 年も住んでいた (んだ)。だから、[英語ができる] {だろう／かもしれない}。

ダカラがカラと同じ判断関係の意味機能を持つことから、このような例におけるダカラを構成的な接続詞と見なすと、判定詞ダは後件とは別のモーダルのスコープ内にある前件との間に照応関係を持っていることになる。

(59) [S1.]_i (anaphor_i + conj) [S2] Modal.



5.2 2 節の問題に対する解決

2 節のまとめにおいて、接続詞と接続助詞の振る舞いの対応と相違に関する問題を、次のようにまとめた。

- (27) a. ソレデは並列関係を表す機能を持つが、ノデは持たない点。
 b. ノデは判断関係を表す機能を持つが、ソレデは持たない点。
 c. ソレデとノデについて、前件に現れ得る要素が異なる点。
 d. ソシテとテについて、前件にラシイ・ヨウダが含まれる場合の解釈の違い。

- (28) ソシテ・ソレデが(27)のような差異を示す一方で、ルカラとダカラの間に差異が見られない点。

これらの問題点のうち(27a, b)に関しては、非構成的なソレデが存在すると考えることによって解決可能である。並列関係を表すソレデは非構成的なソレデであり、その場合、代示要素は前件との間に照応関係を持たないため、現れ得る要素が異なることも問題にならない。また(28)についても、ソシテ・ソレデと異なり、ダカラには(1)のような制約が存在しないことで説明可能である。残された(27b, d)の問題点についても、(1)の制約によって説明できることを、以下で示す。

(27b)について

5.1 節で田窪(1987, 1992, 2001)を引用して、カラ節・ノデ節が判断関係を表すと解釈される場合に、前件が後件のモーダル・スコープに入らないことについて述べた。つまり、判断関係として解釈される例では、前件と後件は別々のモーダル・スコープに含まれていることになる。

また、ソレデを用いた場合に、ノデ節と同じように前件と後件が判断関係として解釈されるためには、ソレデに含まれる代示要素のソレが、前件との間に照応関係を持たなければならない。しかし、照応関係について(1)の制限があるため、前件と後件が別々のモーダル・スコープにある場合は、ソレデと前件は照応関係を持つことができない。このため、ソレデは判断関係の意味機能を持ち得ないことになる。

- (60) a. [S1]+ので+[S2]。
b. [S1]+(それ+で)+[S2]。

!----×---↑

(27d)について

前件にヨウダ・ラシイを含み、前件と後件が上で述べたような意味的關係として解釈される場合、後件では推論の根拠を述べることになる²⁹。このとき、前件と後件は別々のモーダル・スコープ内にある。(1)の制約から、ソシテは前件と後件が別々のモーダル・スコープ内にあると、前件との間に照応関係を持つことができない。そのため、テを用いた場合に見られる後件で推論の根拠を述べるような用法は、ソシテには存在し得ないことが説明できる。

²⁹ 推論の根拠となることがらは、話し手の直接経験であってもよいし、別の推論によって導かれた結論であってもよい。

5.3 5節のまとめ

5節では、代示要素と前件の間の照応可能性に関して、(1)のような制約を想定することで、2節で述べた接続詞と接続助詞の振る舞い・機能の差異について正しい予測ができることを述べた。

6 おわりに

本論文では、接続詞の構成的見方／非構成的見方という2つの立場を出発点として、接続詞ソシテ・ソレデ・ダカラの機能について議論を行った。特にソシテ・ソレデに関しては、構成的なものと非構成的なものの両方が存在することを示し、さらに(1)のような制約を考えることで、ソシテ・ソレデがどのような機能を持ちうるか、テ・ノデとどのような違いを見せるかについて説明できることを述べた。(1)では、ソシテ・ソレデという特定の表現に言及した述べ方になっているが、この制約は更に一般的に「ソ系列指示詞を代示要素として含む接続詞は、前件と後件が異なるモーダルの意味的スコープに含まれる場合には、前件と照応関係を持つことができない」という形に拡張できる可能性がある³⁰。

これまでの研究において、接続詞の機能の広がりには歴史的な要因や認知的な要因による説明を与えられることが多かった (Sweetser 1990、甲田 2001 など)。しかし、これらの説明だけでは、ダカラとソレデのようにどちらも因果関係を表す機能を持つ接続詞が、一方は判断関係を表す機能を持ち、もう一方は持たない、という状況は、偶然の結果に過ぎないことになる。(1)のような制約の存在は、接続詞の機能の広がりを考える際に、認知的・歴史的要因だけでなく、照応可能性のような統語的・意味的要因をも考慮する必要性を示すものと考えられる。

例文表記に用いる記号と略記法

例文の前につけた* は、当該の例文が容認不可能であることを示す。? および (?) は容認度が低いことを示す。(?) よりも ? のほうが、より容認度が低い。

紙面を節約するために、文のある要素に複数の選択肢がある場合は、{A/B/C} のように括弧でくくって選択肢を示す。選択肢のうちのある表現を用いると容認度が下がる場合には、その表現の前に記号を付して示す。例. {A/*B/C}

ただし、文献から引用した例については、基本的に引用元の表記法を用いている。

³⁰ 田村(2005) では、ソレカラについてもこの制約が働いている可能性を、不完全ながら指摘している。

参考文献

- 有賀千佳子 1993 「対話における接続詞の機能について―「それで」の用法を手がかりに―」『日本語教育』79: pp. 89-101
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘著 2001 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』白川博之監修 スリーエーネットワーク
- 岩崎^{たかし}草 1995 「ノデとカラー原因・理由を表す接続助詞―」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）』pp. 506-513 くろしお出版
- 金善美 2000 「談話における接続詞「それで」の用法」『岡大國文論稿』28: pp. 81-71
- 工藤真由美 1989 「現代日本語のパーフェクトをめぐる」言語学研究会編『ことばの科学3』pp. 53-118
- 工藤真由美 1992 「現代日本語の時間の従属構文」『横浜国立大学人文紀要 第二類 語学・文学』39: pp. 169-191
- 甲田直美 2001 『談話・テキストの展開のメカニズム―接続表現と談話標識の認知的考察―』風間書房
- 佐久間まゆみ 1991 「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学紀要 文学部』41: pp. 9-22
- 佐治圭三 1970 「接続詞の分類」『月刊文法』(2)12: pp. 28-39 （佐治圭三 1991 『日本語の文法の研究』ひつじ書房 pp. 281-301 に再録）
- 田窪行則 1987 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6(5): pp. 37-48
- 田窪行則 1992 「談話管理の標識について」文化言語学編集委員会編『文化言語学―その提言と建設―』pp. 1110-1097
- 田窪行則 1993 「談話管理理論から見た日本語の反事実条件文」益岡隆志編『日本語の条件表現』pp. 169-183 くろしお出版
- 田窪行則 2001 「現代日本語における2種のモーダル助動詞類について」梅田博之教授古稀記念論叢刊行委員会編『韓日語文学論叢』pp. 1003-1025 ソウル：太学社
- 田窪行則 2004 「現代日本語における2種のモーダル助動詞類について」田窪行則編『認知的スケールとその言語的繁栄に関する理論的・実証的研究』平成13年度～平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書 pp.1-13（田窪2001を一部修正して再掲）
- 田村早苗 2005 「日本語接続表現の構造と意味機能―特にモーダルとの関係を中心として―」京都大学修士論文
- 塚原鉄雄 1968 「接続詞」『月刊文法』1(1): pp. 39-43

- 永野賢[＊]1952「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』29(2) (服部四郎・大野晋・阪倉篤義・松村明編『日本の言語学第4巻文法II』大修館書店 pp. 467-488 に再録)
- 仁田義雄 1995「シテ形接続をめぐって」仁田義雄編『複文の研究(上)』pp. 87-126 くろしお出版
- 浜田麻里 1995「いわゆる添加の接続語について」仁田義雄編『複文の研究(下)』pp. 439-461 くろしお出版
- ひけひろし 1985「「そして」と「それから」」『教育国語』83: pp. 44-53
- ひけひろし 1986「接続詞「そこで」「それで」」『教育国語』86: pp. 74-89
- ひけひろし 1987「「それで」「だから」「したがって」」『教育国語』88: pp. 46-59
- 益岡隆志・田窪行則 1992『基礎日本語文法 一改訂版一』くろしお出版
- 森田良行 1989『基礎日本語辞典』角川書店
- Grice, P. 1975. Logic and Conversation. In Cole, P. and J. L. Morgan. (eds.) *Speech Acts, Syntax and Semantics*. Vol. 3.:pp. 41-58. San Diego: Academic Press.
- Hopper, P. J. and E. C. Traugott. 1933. *Grammaticalization*. Cambridge University Press.
- Matsui, T. 2002. Semantic and Pragmatics of a Japanese Discourse Marker *Dakara* (So/In Other Words): a Unitary Account. *Journal of Pragmatics*. 34: pp. 867-891
- Sweetser, E. E. 1990. *From etymology to pragmatics*. Cambridge University Press.

Abstract

(Non-) Compositionality of Japanese conjunctions:

Sosite, sorede, dakara

Sanae Tamura

In analyzing Japanese conjunctions, there are two types of approaches: “compositional approach” and “noncompositional approach” (=“grammaticalization approach”). The former regards conjunctions as functional units, while the latter regards them as functional complexes composed of anaphoric elements and conjunctive particles. The purpose of this paper is to show that there are both compositional and noncompositional conjunctions in Japanese. By observing the semantic scope of modal auxiliaries, I argue that *sosite/sorede/dakara* with a causal function are compositional, while *sosite/sorede* with a simple co-ordinate function are noncompositional. Furthermore, I suggest that the functional differences between conjunctions and conjunctive particles are correctly predicted by restriction (1) given below.

- (1) *Sosite/sorede* cannot have an anaphoric relation with the antecedent sentence when both sentences are in the scope of different modals.

(受理日 2005 年 7 月 1 日)